

ラオデキア - ナンバー3

ルールは何ですか？

Jeff Pippenger

2023-08-30

「私たちは自ら、キリスト教の本質は何か、真理とは何か、私たちが受けた信仰とは何か、聖書の規則-最高の権威から私たちに与えられた規則-とは何かを知っておくべきである。」『1888年資料』403頁。

この数年間、Future for Americaは、黙示録の七つの教会が、使徒たちの時代から世の終わりに至るまでの現代イスラエルの歴史を表しているだけでなく、モーセの時代からステパノが石打ちにされたときまでの古代イスラエルも表していると指摘してきました。アドベンチズムの先駆者たちはこの真理を教えてはいませんでしたが、この真理を確立する原則を理解し、用いていました。イエスは初めから終わりを示され、古代イスラエルは現代イスラエルを表しています。ゆえに、現代イスラエルの預言的特質の一部であるいかなる真理も、古代イスラエルにも存在していました。

ミラー派の歴史以前、七つの教会に関する伝統的なキリスト教の見解は、それらがヨハネの時代の小アジアに実在した諸教会を表しているというものだった。伝統的見解はまた、各教会に向けられた勧告は、キリスト教史を通じてさまざまな教会への特定の勧告をも表していると理解し、同じ勧告と警告は個々のクリスチャンに対するものでもあると理解していた。さらに、七つの教会は、弟子たちの時代から世の終わりまでの教会史の七つの時代を表すとも理解されていた。これらの見解はミラー派の歴史に先行していた。ウィリアム・ミラー以前に存在した伝統的見解を構成する七つの教会に関するこれら四つの認識は、当時も今も「歴史主義」的な聖書解釈に基づいている。まさにその方法論こそ、神の御使いたちがウィリアム・ミラーに採用するよう導いたものである。

アジアの七つの教会は、使徒たちの時代から世の終わりに至るまで、教会が示す七つの姿において、そのあらゆる曲折、その繁栄と逆境のすべてをたどる、キリストの教会の歴史である。七つの封印は、教会に対して地上の権力と諸王が行った事柄と、同じ期間における神の民への守りの歴史である。七つのラッパは、地上、すなわちローマ帝国に下された、特異で重い七つの裁きの歴史である。そして七つの鉢は、教皇ローマに下された最後の七つの災いである。これらに交じって他にも多くの出来事があり、それらは支流のように織り込まれて預言という大河を満たし、ついにはすべてが永遠の大海へと注ぎ込んで終わる。

これは、私にとって、『黙示録』に記されたヨハネの預言の構想である。そして、この書を理解しようとする者は、神の言葉のほかの部分についても徹底した知識を備えていなければならない。この預言に用いられている象徴や隠喩は、すべてがこの書の中で説明されているわけではなく、他の預言書において見いだされ、聖書の他の箇所でも解き明かされるべきものである。ゆえに、いかなる部分を明確に知るためであっても、全体を学ぶようにと神が意図しておられることは明らかである。ウィリアム・ミラー『ミラーの講義』第2巻、第12講、178。

ホワイト姉妹は、ミラーが抱いていた「歴史主義」の見解に同意し、それを支持しているが、ミラーが見た以上に黙示録についてのより深い洞察を付け加えた。というのも、ミラーは聖所を本来の姿として認識しておらず、聖所を地球だと理解していたからである。ホワイト姉妹は、イエスが黙示録に記されている予言を提示したとき、それがキリストの天の大祭司としての働きとともに行われていたことを認識していた。

ヨハネが振り向いてキリストを見ると、キリストは祭司の装束をまとい、燭台の間を歩いておられる。そして燭台は聖所に置かれている。したがってそれは、キリストが昇天された後で、しかし1844年に至聖所に入られる以前の時代を指している。ミラーにはこの事実の意義を理解しえなかった。ティンダル、ルター、ジョン・ウィクリフ、ほかの初期の宗教改革者たちも同様だっただろう。真理は進歩的であり、完全な日が来るまで、ますます明るく輝きを増していく。

ロビンソンとロジャー・ウィリアムズが気高く擁護した偉大な原則、すなわち、真理は進展するものであり、キリスト者は神の聖なる御言葉から輝くあらゆる光を受け入れる用意を常に備えるべきだ、という原則は、彼らの子孫によって見失われた。宗教改革の祝福を受けるといふ大いなる恵みにあずかったアメリカのプロテスタント諸教会-ヨーロッパの諸教会も同様に-は、改革の道を押し進めていくことに失敗した。時おり、少数の忠実な人々が現れて新しい真理を宣言し、長らく温存されてきた誤謬を暴いたが、大多数は、キリストの時代のユダヤ人やルターの時代の教皇派のように、父祖が信じたとおりに信じ、父祖が生きたとおりに生きることによって満足していた。それゆえ、宗教は再び形式主義へと墮し、もし教会が神の御言葉の光のうちを歩み続けていたならば捨て去られていたであろう誤謬と迷信が保持され、むしろ重んじられた。こうして宗教改革によって鼓舞された精神はしだいに消えゆき、やがてプロテスタント諸教会にも、ルターの時代のローマ教会におけるのとほとんど同じほどの改革の必要が生じるに至った。そこには同じような世俗性と霊的惰眠、人間の意見への同様の崇敬、そして神の御言葉の教えを人間の理論に置き換えることがあった。『大いなる論争』297頁。

もし、真理が歴史を通じて漸進的に発展するという事実が認められないなら、この最後の世代におけるいかなる新しい光の意義も、ほとんど認識できなくなるだろう。ひとたび「真理」の漸進的な性質を理解しなくなると、人は自ずと伝統や慣習、墮落した人間の導きに頼り始める。

ミラーが用いた方法論は、使徒たちに始まった聖書の真理の発展を証しする預言の系譜全体を貫く道標である。しかし、ミラーによって示されるその道標には、終わりに対応するものを求める始まりがある。ほとんどの人はこれらの現実を理解することはないが、サタンはそうではない。

サタンは、天における反逆以来、真理とその発展に抵抗し続けてきた。歴史が進み、宗教改革者たちが聖書の研究方法を明確に理解し始めた時、サタンはいつものように偽物を持ち込んだ。彼が真理を偽造してきた働きを示す歴史的証拠は、リベラやルイス・デ・アルカサルといったイエズス会士たちが、その偽りの方法論をとりわけ『ヨハネの黙示録』に向けて展開したことを明らかにしている。「過去成就説」と呼ばれる歪められた方法論は、2~3世紀に二人の主要な代表者とともに始まった。ひとりはいかサリアのエウセビ

オス（260～339）、もうひとりにはペタウのヴィクトリヌス（304年頃没）である。これら二人の初期の歴史的人物はいずれも、悪名高い皇帝ネロなどの歴史上の人物の時代、すなわちローマ帝国期に『ヨハネの黙示録』はすでに成就したとする方法論を唱えた。

19世紀、イギリス出身のジョン・ダービー（1800-1882）は、私たちが以前に指摘した「トロイの木馬の聖書」と呼ばれるスコフィールド・リファレンス・バイブルの脚注にも盛り込まれた、別のサタンの方法論を導入した。「ディスペンセーションリズム」とは、歴史と神が人類と関わるあり方を、神がご自分の計画を異なるやり方で執行するそれぞれ独立した期間（「ディスペンセーション」）に分ける神学的枠組みである。ここでこれに触れておくのは、これは、ダービーがそのサタンの考えを広めたのと同じ地域からの声によって、フューチャー・フォー・アメリカの運動に持ち込まれた偽りの一つだからである。フューチャー・フォー・アメリカを攻撃したダービーの考えには、フランス革命に象徴される同じ無政府状態と、ソドムとゴモラに象徴される同じ放縦さを推進する、いわゆる現代の「woke」運動の哲学が伴っていた。

今日、現代アドベンチズムの神学者たちは、聖書と「預言の霊」の双方を弱体化させ否定するために用いる二本立ての聖書解釈体系に基づいて、聖書の真理を解剖するかのようには分解している。彼らは人々を、聖書の原語の専門家か聖書史の専門家かのいずれかとして位置づける。こうして今日のアドベンチズムの神学者たちは、墮落した人間の歴史理解または言語理解に基づいて神の言葉を解釈することによって、ラオディキア的なアドベンチズムの思考を支配している。いまあなたが読んでいるこのメッセージを攻撃するためにたびたび用いられてきた、こうした現代的な誤りの現れについては、フランス革命の象徴性を考察する際に、これらの記事の中でさらに取り上げる。サタンは生きており、自分の時が短いことを知っている。ミラーの規則の最後、すなわち第十四条は、次の段落で締めくくられている。

私たちの学校で教えられている神学は、常に何らかの教派的信条に基づいている。白紙の心を取り上げ、こうした類のものを刷り込むことはできるかもしれないが、結局は偏狭に終わる。自由な精神は他人の見解に決して満足しない。もし私が若者に神学を教える教師であったなら、まず彼らの能力と心を見極めよう。これらが良ければ、彼ら自身に聖書を学ばせ、自由に世のために善をなすよう送り出すだろう。だがもし彼らに心がなければ、他人の心で焼き印を押し、額に「偏狭者」と書きつけ、奴隷として送り出すだろう！ ウィリアム・ミラー『ミラー著作集』第1巻、24頁。

黙示録のヨハネが生きていた直後の時期、そして宗教改革の時代にも、サタンは真の聖書的分析を混乱させ破壊するために、偽りの預言的な方法論を積極的に作り出していた。これらの歴史的事実においてしばしば見落とされるのは、そうしたサタンの方法論が、他ならぬ黙示録という書だけを狙って直接向けられていたということである。サタンの混乱を広めるこれらの推進者たちが取り上げた主題はいずれも黙示録であった。黙示録は常にサタンの標的である。サタンは、自分が戦わねばならないのは黙示録であることを知っている。この事実を認識するとき、私たちは、別の重要な真理によって覆い隠されている、もう一つの見えざる現実を認識できる。

イエズス会の誤った方法論は、ローマ教会の教皇こそが聖書の預言における反キリストであるということを明確に理解させないために意図されたものであった。すべてのプロテ

スタントの宗教改革者は、この真理を認め、特定するに至った。したがって、過去に、リベラやルイス・デ・アルカサルといった人物の正確な歴史が口頭や出版物を通して公に示されると、その歴史は「罪の人」の正しい理解を妨げようとするサタンの策動を示すために用いられてきた。これらのサタンの手法の導入の目的を暴露する書面または口頭の証言は、それらが及ぶ限りでは正しいが、サタンは、反キリストをローマの教皇として特定する聖書的証拠を単に隠そうとただけではなく、さらに多くのことを覆い隠そうとしていた。

ヨハネの黙示録には、数が六百六十六である人の主題から逸脱したこれらの誤った聖書解釈体系が生み出した混乱によって覆い隠されてきた真理がある。そうした真理の一つは、七つの教会がその最も完全な姿において理解されるときに示される真理であることは、まぎれもない。七つの教会のうちには、2001年9月11日に始まり、日曜法の危機で終結する歴史に直接語りかける真理がある。サタンはこの光を埋もれさせようとし続け、ヨハネの黙示録にある、ローマ教皇を反キリストと同定することを含むがそれに限られないいくつかの真理の宝石を覆い隠すために、悪魔的な方法論を考案した。

538年に「罪の人」が現れた以前、エウセビオスやウィクトリヌスのような人々は、教皇権の台頭を覆い隠そうとして『ヨハネの黙示録』を攻撃した。さらに後の歴史において、キリストはテアテラへの約束を成就し、宗教改革の明けの明星（ウィクリフ）を起こされた。そしてその後、サタンは自らの悪魔的な業を擁護し引き継がせるために、二人の著名な歴史的人物を立てた。『ヨハネの黙示録』の秘義の封印が解かれるとき（猶予期間の終結直前）に頂点に達する、真理の展開をめぐる長期にわたる戦いは、ミラーもホワイト夫人も認めなかった「七つの教会」からの光を含んでいる。しかし、新しい光は古い光に決して矛盾しないので、ミラーも「預言の霊」もこの新しい光を支持していることは容易に示すことができる。

私たちが真理を持っているのは事実であり、揺るがない立場を固く守らなければならない。しかし、神がお与えになるかもしれないどんな新しい光も疑いの目で見て、こう言うてはならない。「実のところ、これまで受け入れ、そこに安住してきた古い真理以上の光が必要だとは私たちには思えない。」この立場にとどまるかぎり、「真の証人」の証言は、私たちに次のように叱責する。「あなたは、自分が惨めで、衰れで、貧しく、盲目で、裸であることを知らない。」自分は富んでいて財が増し加わり、何も必要としていないと感じている者たちは、神の前での自分の真の状態については盲目であり、そのことを知らない。レビュー・アンド・ヘラルド、1894年8月7日。

新たな光に対する第一の試金石は、それが確立された真理と矛盾しないかどうか、そして根本的な真理を堅持しているかどうかである。

「神の力が何が真理であることを証しするとき、その真理はいつまでも真理として立ち続けるべきである。神が与えられた光に反する後日の臆測は、いっさい受け入れてはならない。人々は、自分たちには真理と見なしている聖書の解釈をもって現れるが、それは真理ではない。この時のための真理を、神は私たちに信仰の土台としてお与えになった。何が真理であることを、神ご自身が私たちに教えてくださった。ある者が現れ、また別の者も現れて、聖霊の証しによって神が与えられた光に反する新しい光を唱えるであろう。」 Selected Messages, book 1, 162.

ヨハネがその中に含まれるメッセージを書き記して以来、サタンは『ヨハネの黙示録』を攻撃の標的としてきた。イエスはこう言われた：

しかし、あなたがたの目は見ているので幸いです。あなたがたの耳も、聞いているので幸いです。まことに、あなたがたに言います。多くの預言者や義人は、あなたがたが見ていることを見たいと願いながらも見られず、あなたがたが聞いていることを聞きたいと願いながらも聞けませんでした。マタイ 13:16、17

見ることに伴う祝福とは、イエス・キリストの黙示のメッセージを理解するという祝福である。「終わりの日」にそのメッセージを見聞きする人々を代表していたヨハネは、天使ガブリエルを礼拝しようとしてひれ伏した。しかしガブリエルは、すぐにそうしてはならないとヨハネに告げた。

そして私ヨハネはこれらのことを見、また聞いた。これらを見聞きしたとき、私はこれらのことを私に示してくれた御使いの足もとにひれ伏して拝もうとした。すると彼は私に言った。「いけない。そのようなことをしてはならない。私はあなたと、あなたの兄弟である預言者たち、そしてこの書の言葉を守る者たちと共に仕える者にすぎない。神を礼拝しなさい。」ヨハネの黙示録 22:8、9。

ガブリエルとジョンは、ともに被造物であり、創造主のみを礼拝すべき存在である。天使をも含めた多くの預言者や義人は、世の終わりにそれが繰り返されるとき、『真夜中の叫び』のメッセージを「見て」「聞く」ことを望んできた。

キリストは言われた。「あなたがたの目は見ているので幸いです。また、あなたがたの耳は聞いているので幸いです。まことにあなたがたに言います。多くの預言者や義人たちは、あなたがたが見ていることを見たいと願いながら、見ることができず、あなたがたが聞いていることを聞きたいと願いながら、聞くことができませんでした」[マタイ 13:16、17]。1843年と1844年に見られた事柄を見た目は幸いです。

「そのメッセージは与えられた。そして、時のしるしが成就しつつあるゆえに、そのメッセージを繰り返して伝えることに遅れがあってはならない。終結の働きは成し遂げられなければならない。大いなる働きが短期間に行われるであろう。まもなく、神の定めにより、大いなる叫びへと膨れ上がるメッセージが与えられるであろう。そのとき、ダニエルは自分の分に立って、証しをするであろう。」原稿公刊集 第21巻 437頁。

義人たち（ヨハネ）とその仲間のしもべたち（天使）が見たいと願っていたのは、アドベンティズムの終わりに、地が神の栄光によって照らされるときに起こる真夜中の叫びの最終的成就であった。後の雨における力の最終的な顕現は、イエス・キリストの黙示の封印が解かれることによってもたらされる。

この救いについては、あなたがたに来るはずの恵みについて預言した預言者たちが、探し求め、熱心に調べた。彼らのうちにおられるキリストの御霊が、キリストの苦難とその後に来る栄光を前もって証しされたとき、それがいつ、またどのような時を指しているのかを探り求めたのである。彼らには、彼ら自身のためではなく、私たちのためにこれらのことに仕えているのだと啓示された。天から遣わされた聖霊によってあなたがたに福音を宣べ伝えた人々を通して、今あなたがたに告げられているこれら

の事柄は、御使いたちも身をかがめてうかがい見たいと願っている。それゆえ、あなたがたの思いの腰に帯を締め、身を慎み、イエス・キリストの現れのとくにあなたがたにもたらされる恵みに、終わりまで望みを置きなさい。ペテロの第一の手紙
1:10-13

預言者たちも、義人たちも、天使たちも、「真夜中の叫び」が最終的に成就し、その間に「恵み」、すなわち神の力が注がれる時代に生きたいと望んできた。その「恵み」、すなわち神の創造の力は、「イエス・キリストの黙示」の封印が解かれるとき、人々にもたらされる。サタンは、神の創造の力を神の民に伝える道が、黙示録において封印が解かれたメッセージによって成し遂げられることを知っている。ゆえに彼は、黙示録に含まれる光を混乱させ、抑え込み、覆い隠すことに全力を注いできた。その光は、単に「不法の人」を特定することだけではない。というのも、その真理は何世紀も前に、すべてのプロテストタンの改革者たちによって十分に記録されているからである。

私は主の日に御霊のうちにいた。そして、背後にラッパのような大きな声を聞いた。こう言った。「わたしはアルファでありオメガ、最初であり最後である。あなたが見ることを書物に書き記し、アジアにある七つの教会、すなわちエペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルディス、フィラデルフィア、ラオデキヤに送りなさい。」私は、私に語りかけるその声が誰のものかを見ようとして振り向いた。振り向くと、七つの金の燭台が見えた。そして七つの燭台の真ん中に、人の子のような方がおられ、足まで届く衣を着ており、胸には金の帯を締めていた。その頭と髪は羊毛のように白く、雪のように白く、その目は燃える炎のようであった。その足は、炉で焼かれて輝く磨かれた青銅のようで、その声は大水のとどろきのようであった。その右手には七つの星を持ち、口からは鋭い両刃の剣が出ており、その顔は強く輝く太陽のようであった。私はその方を見たとき、死人のようにその足もとに倒れた。すると彼は右手を私の上に置いて言われた。「恐れるな。わたしは最初であり最後である。わたしは生きている者であり、いったん死んだ。しかし見よ、永遠に生きている。アーメン。また、死とハデスの鍵を持っている。あなたの見たこと、今あること、これから後に起こることを書き記しなさい。」ヨハネの黙示録 1:10-19

アドベンチズムは「歴史主義」の方法論を堅持していたが、黙示録2章と3章のすべての教会が最後の教会において繰り返されることを認識していた。不幸にも、19世紀末にはすでに、サタンはアドベンチズムの目を聖なる方法論からそらし、またそれを守り実践することが、彼らが「預言の偉大な真理の保管者」として負う責務の不可欠な一部であるという事実に対しても目を閉ざさせつつあった。アドベンチズムの中でその方法論が脇に追いやられつつあった時でさえ、なお聖なる方法論を適用する者たちがいた。私たちは『Story of the Seer of Patmos』という書を、すべての教会をラオデキヤの歴史に適用することが預言の正当な適用であるという事実の証言として用いる。以下は、その点を示すためにその書から抜粋したものである。

キリストの再臨前の最後の教会においてエペソ、スミルナ、ペルガモの経験が繰り返されるのと同様に、テアテラの歴史にも最後の世代における対応するものがあることを、覚えておくべきである。スティーブン・N・ハスケル『パトモスの先見者の物語』69ページ。

ハスケルは、最初の四つの教会の経験が繰り返されることを正しく指摘し、彼の言葉では『最後の世代にそれに相当するものが現れるだろう』としている。

「彼はその検証を当てはめたが、すべては、世界が救い主を迎えねばならない時として1843年を指し示していた。キリストの初臨の時の人々の状態が、今また再現された。」 Stephen N. Haskell, 『パトモスの預言者の物語』, 75.

ハスケルは、ウィリアム・ミラーが1843年をキリストの再臨の年としたことについて語り、初臨の時の状況がミラー派の時代に繰り返されたことを指摘している。ハスケルは正しく、ホワイト夫人はミラー自身がバプテスマのヨハネによって象徴されていたことを確認している。

「バプテスマのヨハネがイエスの初臨を告げ知らせ、その来臨のために道を備えたように、ウィリアム・ミラーと彼に加わった人々も、神の御子の再臨を宣べ伝えた。」 『初期の著作』 229ページ。

ハスケルは、ペルガモ（偶像崇拜との妥協を象徴する第三の教会）の時代に、第五の教会であるサルディスの歴史が繰り返されたことさえ指摘している。

「ペルガモスの歴史において、キリスト教は異教が死んだと思いついた時期があった。しかし実際には、見かけ上は打ち負かされたはずの宗教が、勝利を収めていた。洗礼を受けた異教が、教会に足を踏み入れた。サルディスの時代に、この歴史は繰り返された。」 スティーブン・N・ハスケル 『パトモスの預言者の物語』 75、76頁。

サルディスは宗教改革の教会であり、教皇制のサタン的な誤謬に目覚めて抗議したが、その働きが終わらないうちに、彼らはすでにローマへ戻り始めていた。彼らはペルガモの教会と同じように、教皇主義は死んだと思っていたが、実際にはなお生きていた。ハスケルはまた、残りの民の教会の上には「過去のすべての時代の蓄積された光線」が輝いていると指摘している。

「この最後の教会——残りの民——の上には、過去のすべての時代の積み重なった光が輝いている。」 Stephen N. Haskell 『パトモスの先見者の物語』 69頁。

私は、ハスケルが、七つの教会に象徴された漸進的な歴史が古代イスラエルの歴史においても成就していたと認識していた、と主張しているわけではない。だが、彼が「過去のあらゆる時代の蓄積された光線」が「最後の教会」に「輝く」と書いているとき、彼は確かにその真理を支持している。古代イスラエルは「過去の時代」の「光線」に含まれている。そして、彼は古代イスラエルの歴史の中に七つの教会の象徴性を認めるために必要な原則を支持してはいるが、その象徴に示された並行関係をどれほど深く認識していたのかについては、私は確信が持てない。さらに、七つの教会によって表される諸歴史の、私たちがこれから論じようとしている、さらに重要な側面を彼が認識していなかったことについては、私は確信している。

この真実については次回の記事で取り上げます。